

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2025 年（令和 7 年）2 月 28 日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 西山 隆行

大学名・職位 成蹊大学法学部・教授

第 42 回（2023 年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。
※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

2024 年米国大統領選挙・連邦議会選挙とマイノリティ

The 2024 U.S. Presidential and Congressional Elections and Minorities

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

Of the two major parties in the United States, the Democratic Party has long been a party with a minority support base, while the Republican Party has a white support base. Republican presidential candidate Donald Trump, contrary to many expectations, won the 2016 presidential election by solidifying the votes of white working-class voters in the Rust Belt, making this trend clear. However, in recent years, diversity has been increasing among minorities in the United States, and it is necessary to clarify how this influences party politics in the United States. The purpose of this research project is to clarify what changes were observed in the voting behavior of minorities in the 2024 presidential election, in which Trump sought reelection. In the 2024 election, it was thought that the above trend may have become even more pronounced because Kamala Harris, a black and Asian woman, became the Democratic presidential candidate. However, the voter turnout rate of blacks was sluggish, and the proportion of people voting for Trump among Latinos increased sharply. The results of this research project revealed that two-party politics and minority politics in the United States are undergoing major changes.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

米国では二大政党のうち、民主党がマイノリティの政党、共和党が白人の政党という傾向が続いている。共和党のドナルド・トランプは、ラストベルトの白人労働者層の票を固めることによって、

多くの予想に反して 2016 年大統領選挙で勝利し、その傾向を鮮明にした。だが、近年の米国ではマイノリティの間でも多様性が増大しつつあるあり、それが米国の政党政治にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることが必要になっている。例えば、民主党の岩盤支持層である黒人については、同性婚などの社会的争点について保守的な傾向があるため、民主党左派が LGB TQIA⁺の権利を強調すれば、民主党への支持をためらうようになるのではないかと予想されてきた。また、中南米系についても民主党支持の傾向が強いが、その多くがカソリックであるため、人工妊娠中絶などの社会的争点について保守的な態度をとる点で共和党の政策と親和性が強いとも指摘されてきた。本研究プロジェクトは、トランプが再選を目指した 2024 年選挙で、マイノリティの投票行動にどのような変化が見られたのかを解明することを目的として設定し、米国における二大政党政治とマイノリティ政治の変容の性格を解明することを目指すものである。

※研究経過と結果の概要 (以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる)

2024 年米国大統領選挙では、共和党候補のトランプが岩盤支持層である白人労働者層へのアピールを強化する一方で、民主党の候補が現職大統領だったジョー・バイデンから、黒人でアジア系の女性であるカマラ・ハリス副大統領に代わったことから、「共和党＝白人の政党」、「民主党＝マイノリティの政党」という傾向が強まる可能性があるとして指摘されていた。だが、実際には黒人の間で熱狂的なオバマ支持が鮮明になった 2008 年大統領選挙の時のようなムーブメントが起こらなかったことに加えて、予想以上に多くの中南米系がトランプに票を投じたことが明らかになった。

これは、マイノリティ内部の多様性に民主党が十分な配慮を行わなかった結果である可能性が高い。例えば中南米系については、キューバ系やベネズエラ系は元々共和党支持の傾向があった。その他の中南米系についても、カソリックが多く、社会的争点では保守的な傾向があるため、中絶や性的少数派の問題を強調する民主党の立場になじめない人々が存在した。このような事情から、中南米系は民主党支持の傾向があるものの、政党帰属意識は弱く、米国生まれか家庭内で英語のみを話す人の中ではもともとトランプ支持の割合もそれなりに高かった。それに加えて、正規の手続きを経て米国籍や永住権を獲得した中南米系にとっては、不法移民の存在は迷惑な可能性もあった。ロンドン大学のエリック・カウフマンは、マイノリティの中に白人の伝統的な価値観を自発的に身につけて「白人化」しつつある人々が存在するとして「ホワイトシフト」という概念を提示しているが、中南米系についてはホワイトシフトの傾向が強くなった可能性がある。

黒人についても、米国で奴隷だった人を祖先に持つ人と、近年アフリカなどから移民してきた人の中には相違がある。黒人教会は社会的争点については保守的な態度をとっており、中絶や同性婚に対する民主党の立場に不満を抱いていたとされる。民主党は黒人に対してアイデンティティという象徴性の次元での支持を強調する一方、黒人が共和党に投票するはずはないという想定の下、貧困な黒人に十分な物質的利益を与えてこなかった。このような傾向に対する黒人の不満は、南部国境周辺州から都市部に移送されてきた不法移民に対する民主党の対応によって顕在化した。いわ

ゆる「聖域都市」は、不法移民にシェルターや食事を提供したが、米国民である黒人の低所得者層がシェルターや食事を希望しても、同様の支援はなされなかった。これら黒人が、民主党から軽んじられているという不満を持った可能性がある。

民主党は、伝統的にアメリカの主流を構成してきたわけではない人々の利益・関心に対応してきた。マイノリティの声をくみ上げ、米国社会で暗黙の前提とされてきた事柄の背景に潜む問題の所在を明らかにしてきた功績は大きい。だが、民主党は人種・民族集団など大きな集団の関心に対応する一方で、その内部の多様性を時に軽視してきた可能性がある。そのような不満を抱いた人々の声をくみ上げたことが、アウトサイダー候補であるトランプの巧みな点だと言える。

この選挙の結果、共和党＝白人の政党、民主党＝マイノリティの政党というパターンに揺らぎが見えたが、この傾向が今後も続くかは不明である。とりわけ、共和党がマイノリティに対して具体的な恩恵を与えることができなかった場合に、マイノリティがどのような投票行動を次回選挙などで取るようになるかが今後の注目点となるであろう。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

1. 「2024年米国大統領選挙の分析(仮題)」『成蹊法学』102号(2025年4月刊行予定)
2. 「トランプ派の『メインストリーム化』と民主党の『過激化』? —2024年アメリカ大統領選挙の分析」水島治郎編『アウトサイダー・ポリティクス』(岩波書店、2025年近刊予定)
3. 西山隆行・前嶋和弘・渡辺将人『混迷のアメリカを読み解く10の論点』(慶應義塾大学出版会、2024年)

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。